

三池炭鉱跡と大牟田市石炭産業科学館

Miike Coal Mines: Omuta Coal Industry and Science Museum

吉田 英生 (京都大学)

Hideo YOSHIDA (Kyoto University)

e-mail: sakura@hideoyoshida.com

1. はじめに

5月4日に、内閣官房 産業遺産の世界遺産登録推進室 (<http://www.cas.go.jp/jp/sangyousekaiisan>) から、

今般、我が国から推薦を行っている「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」について、ユネスコ世界遺産委員会の諮問機関である ICOMOS (イコモス) による勧告がユネスコ世界遺産センターより通知されました。

と発表された。そこで、福岡での伝熱シンポジウムが終わった翌日の6月6日、博多からJR鹿児島線の快速で1時間あまりの大牟田に足を運び、三池炭鉱関連の遺産見学をした。

勧告の吉報に沸く地元ではのぼりも多数はためき、ボランティアの方々の説明も懇切で、各種ウェブサイト[1-4]にも充実した解説があるので、にわか勉強の筆者があえて報告するほどでもないのだが、大牟田市石炭産業科学館で入手した充実したガイドブック(全138ページ)[5]などにはインターネットではなかなか見つからない貴重な情報もあるように思うので、旅行記の要素も含めて紹介させていただく。なお、筆者は素人ではあるものの炭鉱に関心があり、田川市石炭資料館(現田川市石炭・歴史博物館)[6]やBig Pit英国国立石炭博物館[7]の拙稿もあわせて参照いただければ幸いである。

2. 宮原坑と万田坑

図1の三池炭鉱関連遺跡の地図からわかるように、見学スポットはJR鹿児島線をはさんで福岡県大牟田市から熊本県荒尾市にかけて広く分布している。当日は幸い天気に恵まれたので、大牟田駅東口にある大牟田観光プラザでレンタサイクルを

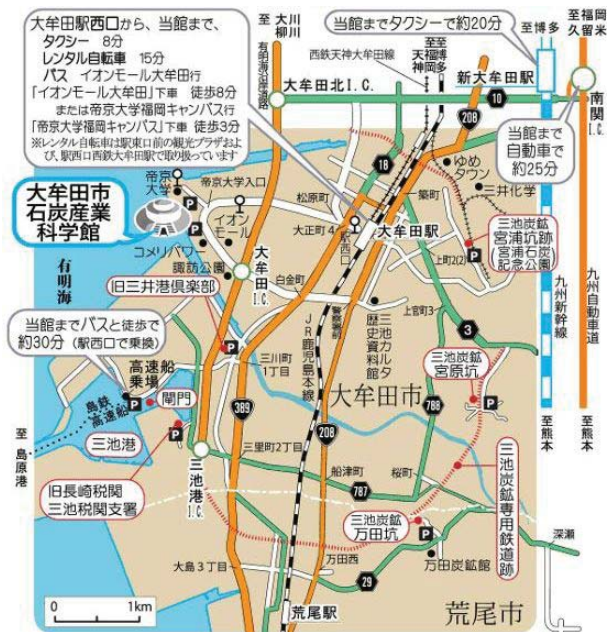


図1 三池炭鉱跡遺産関連の地図

(<http://www.sekitan-omuta.jp/top.html> より)

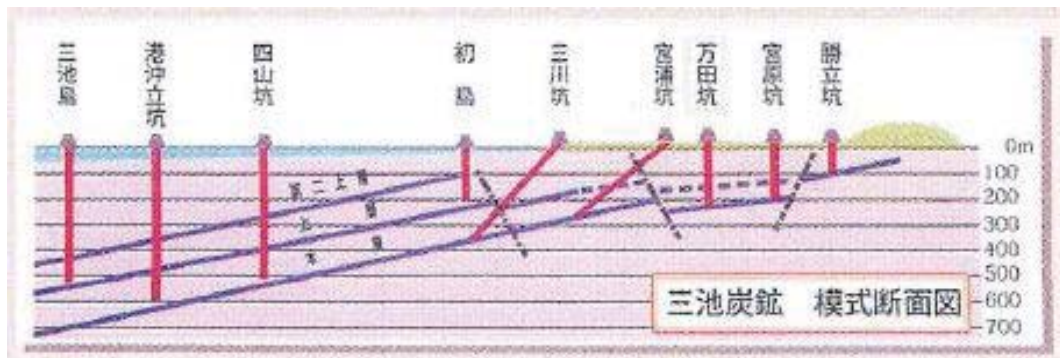


図2 三池炭鉱 模式断面図 (万田坑ステーションで入手できる案内書より)



図3 石炭層（三池本層）の等深線図[5]



図4 宮原坑跡と鉄道敷跡

4時間300円(電動自転車の場合は600円)で借りた。最初の見学ポイントは駅の東南側の宮原坑で、自転車なら20分もかからない。

最初に、三池炭鉱の全容を把握するために図2と図3を見ていただきたい。図2に示すように三池炭田で主に採掘の対象になったのは、本層、上層、第二上層とよばれた3枚の石炭層である。各層の厚さは2~6mほどで、有明海に向かって南西方向におよそ5度の角度で傾斜している。このことは図3で高取山の少し北側を中心として、石炭層の等深線が扇状に広がっていることから明確に確認できる。このため歴史的には浅い方から深い方に徐々に坑口が作られ、最終的には坑道が有明海の下にまで延びた。

2.1 宮原坑

宮原坑の第一堅坑は、明治28(1895)年着工、明治30(1897)年に深さ141mで着炭、明治31(1898)年には、排水・揚炭のための坑外諸施設が完成し、出炭を開始した。第二堅坑は、明治32(1899)年着工、明治33(1900)年に深さ160mで着炭、明治34(1901)年には設備が完成した。かつて主役として活躍した蒸気機関とデビーポンプがあった建物は北側の壁だけが残るが、巻揚機のある建物は機械とともに残っている(図4)。巻揚機は炭車あるいは鉱夫が乗ったケージを上下に駆動するものであるが、上端(地上)と下端(地下坑道)での位置合わせを、昔は鐘・ベルなど音の信号で行ったそうだ。巻上機の動力は、当初は蒸気機関であったが後に電動機になった。

その後、新たに四山坑、宮浦大斜坑からの採炭



図5 万田坑跡（正面より）



図6 万田坑跡（第二縦坑巻上機室より）

に中心が移り、それまでの主力坑であった大浦坑、勝立坑、七浦坑とともに、宮原坑も昭和6(1931)年に閉坑となる。

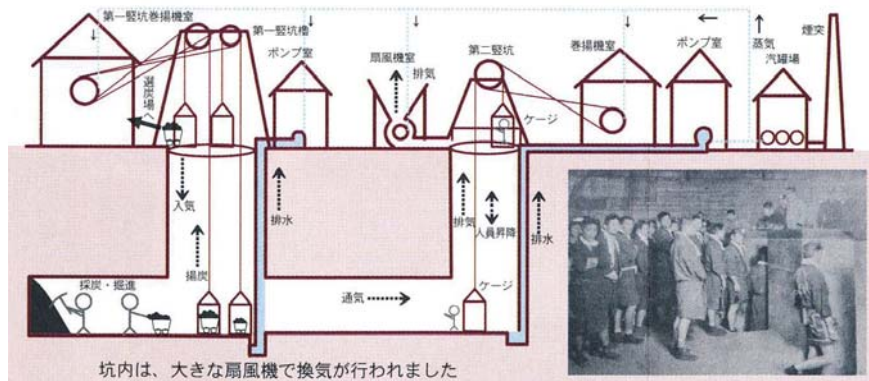


図7 万田坑の概略構造（万田坑ステーションで入手できる案内書より）



図8 坑道入口



図9 坑道信号所



図10 浴室

2.2 万田坑

宮原坑から万田坑は直線距離（鉄道跡）では近くみえるが、実際に自転車で走ってみると道は複雑かつ三角形の2辺に行くような遠回りで、手元に簡単な地図はあったものの実際には道案内も少なく、地元の方に途中数回たずねてようやくたどり着いた。入場無料の宮原坑とは異なり410円の入場料が必要ではあるが、三池炭鉱を理解するにはやはり万田坑見学が必須であろう。入場券を購入する万田坑ステーションにはコンパクトながらも貴重な映像、写真、模型などの展示がある。蛇足ながら、売店にくまモンがいることで荒尾市が熊本県であることに気づく。

万田坑の第一堅坑は明治30（1897）年着工，明治32（1899）年に完成，深さ271mであり，明治35（1902）年に着炭し出炭を開始した。これは宮原坑の4年後である。第二堅坑は明治41（1908）年に完成，深さは264mである。万田坑では宮原坑より20年長く採炭し，昭和26（1951）に閉坑した。広大な敷地には多数の遺産がある（図5，図6）。

万田坑の概略構造は図7に示すようで，図8が坑道入口でケージが見える。図9が奥にある坑道信号所である。拙稿[7]にも書いたように炭鉱と言えどもまず思い出されるのはJohn Ford監督の“*How Green Was My Valley*”（邦題“わが谷は緑なりき”）であり，とりわけ過酷な坑内労働のあとの入浴シーンは悲しいドラマの中で数少ない幸せを感じさせてくれる。図10の浴室を眺めながら，坑内で1日の仕事を終えた男も女も夕食前の至福のひとつときを味わったのではなかろうかと想像した。

なお，万田坑施設ガイドブック（団体ガイド用マニュアル）[8]がインターネットから入手できるので，一読をお薦めする。

3. 大牟田市石炭産業科学館

万田坑から県道29号線を西に向かうと国道208号線に出会う。これに沿って北上すれば大牟田には迷わずに戻ることができる。途中、三池炭鉱の礎を築いた團琢磨（1858-1932）が

石炭山の永久などという事はありはせぬ。無くなると今この人たちが市となっているのがまた野になってしまう。これはどうも何か（住民の）救済の法を考えて置かぬと実に始末につかぬことになるというところから、自分は一層この築港について集中した。築港をやれば、築港のためにそこにまた産業を起こすことができる。石炭が無くなっても他処の石炭を持ってきて事業をしてもよろしい。（港があれば）その土地が一の都会になるから、都市として“メンテーン”（維持）するについて築港をしておけば、何年もつかしめぬけれども、いくらか百年の基礎になる。[1]

と心血を注いだ三池港が西にあるが、時間がなかったため、大牟田駅真西の海岸寄り、巨大スーパーなども立地する新開発地域にある大牟田市石炭産業科学館に直行した。

同館は図11のような威容を誇る建物であり、エントランスの壁は実際の石炭層を再現しており、入場するやいなや石炭の存在感に圧倒される。ここでは、まず團琢磨の生涯に焦点を当てた映像や三池港の築港の映像が、ポイントをわかりやすく教えてくれる。團は13歳のときに岩倉使節団に同行して渡米し、MIT（当時はBoston Techと呼ばれていた）鉱山学科で学んだ。前述のように百年先を見越して果敢に行動したことには感動を覚える。

実は、筆者はこの日「仁和寺の法師」状態であった。ホールの奥まったところからエレベーターで明海の地下400mまで移動し坑内探検できる「ダイナミックトンネル」なる模擬坑道があったのだが、それに気づかず帰りを急いでしまったのだ。同トンネルを訪れた知人によると、これは圧巻で一見の価値があるとのことである。

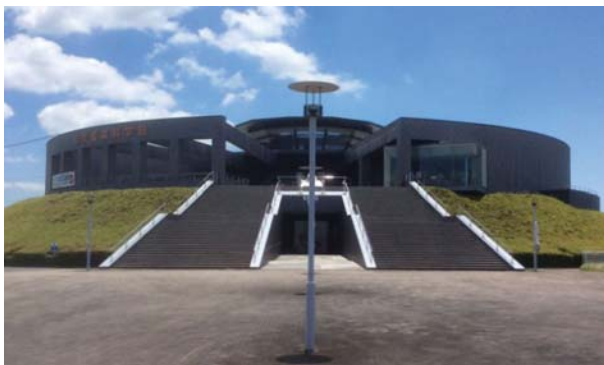


図11 大牟田市石炭産業科学館

4. むすび

拙稿[6]に以下のように記載した：

炭鉱では、炭じん爆発事故がときどき発生し、多数の犠牲者を出してきた。昭和38年（1963年）11月9日には三井三池炭鉱三川坑で死者458人という最悪の事故が起こった。事故を告げる、真っ黒かつ非常に大きな字で印刷された新聞記事を見るのは、子供心ながら怖かった。

これは、東京オリンピック・東海道新幹線開業の1年前のことである。万田坑での案内の方によると、これらの事故の遺族の生活を少しでも安定したものとするため、近隣のいろいろな工場で働くことができるように努めたそうである。團が早い時点で喝破したように、やがて炭鉱はその使命を終えたが、三池港の存在にも助けられ三井系の多くの企業が今の大牟田市地域を支えている。現在は、世界遺産登録が射程距離に入ったこともあり、今回の三池炭鉱跡の見学ではどことなく明るい雰囲気を感じられた。しかし、拙稿[6]で引用した永末十四雄の以下の文章[9]

<エネルギー革命>は一般には時代の経済的動向の修辭にすぎぬものとして記憶されるかもしれないが、筑豊の住民は<革命>の言葉の意味するもの、その苛烈さ、酷薄さ、重たさを痛切に思いしらされてきた。

において「筑豊」を「三池」に置き換えても間違いあるまい。おりしも福岡市博物館ではこの6月6日から、開館25周年記念「世界記憶遺産・山本作兵衛の世界 ～記憶の坑道～」が開催されていた。

参考文献

- [1] <https://www.miike-coalmines.jp/port.html>
- [2] <http://www.kyuyama.jp/index.html>
- [3] http://www.city.omuta.lg.jp/hpkiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=613&pg=1&type=ranking
- [4] <http://www.city.arao.lg.jp/mandako/>
- [5] 大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブ編集、三池炭鉱の歴史と技術～大牟田市石炭産業科学館ガイドブック～（2014）。
- [6] 吉田英生、田川市石炭資料館、伝熱 43-183（2004）41。
<http://www.wattandedison.com/tagawa.pdf>
- [7] 吉田英生、Big Pit 英国国立石炭博物館、書き下ろし（2012）
http://www.wattandedison.com/Big_Pit.pdf
- [8] 荒尾市教育委員会生涯学習課編、万田坑施設ガイドブック（団体ガイド用マニュアル）（上記の語句を検索エンジンに入力すればダウンロード可）
- [9] 永末十四雄、筑豊 石炭の地域史、NHK ブックス 199、日本放送出版協会（1973）。